

でも、描きつづけることで、昔から続く伝統の良さを知ってほしいですね」と物静かな中にも、はつきりと表現したいテーマを語ります。

200年以上も前から続くという「つく舞」は、カエルのお面を頭に乘せ、ジューウジロウサンと呼ばれる舞手が約14メートルの柱に登り、柱上で倒立したり四方に矢



上町地区社会福祉協議会の広報紙「杜のまち」の表紙の切り絵も荒井さんの手によるもの

を射ったりする三ヶ町夏祭りならではの民俗行事で、平成5年には千葉県無形民俗文化財に指定されています。

三ヶ町夏祭りは、毎年7月中旬に3日間、上・中・下町で行われる行事で、荒井さんも自ら上町の若い衆として参加していたころを懐かしむかのように「7月になるとまつりの準備にとりかかり、お囃子の音が聞こえらると、何だかいても立ってもいられない気持ちになります。子どもころから、この気持ちはずつと変わりません。三ヶ町夏祭りは、上・中・下町で持ち回りの『年番』という当番があって、獅子のみこしを担ぐ年番の『迎え獅子』、その翌年に天王様みこしを担ぎます。そして、『明け番』は、

『つく番』として『つく舞』を行います。おまつりの時は、主にお囃子を担当します」と、語ってくださいました。

木彫りのミニチュアみこしも手がけて

荒井さんの住む上町では、かつてつく舞の年に担ぐみこしがなかったため、つく

舞に使うカエルのお面をモデルに、昭和7年に雨蛙みこしを作ったそうですが、現在は昭和49年に作られた二代目です。制作費もかなりかかり、当時の若い衆は、飲み食いをはまんにしても、カエルのみこしを復活させようと一生懸命だったそうで、荒井

さんもそのひとりでした。

今では、そのころを思い出すかのように、獅子みこしに続き、木彫りでミニチュアのカエルのみこしを制作しています。

以前に、愛宕神社の倉庫を建替える際、古い物置の整理に立ち会った時に安政4(1857)



年の直径1メートルもある提灯や、昭和7年と記載されたつく舞に使われた柱などがでてきて、「嬉しい発見」となったそうです。生まれ育った地元に着と誇りを持ち、素晴らしい切り絵を通して、野田の伝統や文化の良さを表現し続ける荒井さん。ていねいに作られた切り絵からは、ふるさとの伝統や行事を大切にする荒井さんの心意気がひしひしと伝わってきました。